

【6】 原始仏教聖典にみる仏弟子たちの一日

[0] この節では原始仏教聖典のデータから仏弟子たちの一日を検討する。とはいえ釈尊の一日も仏弟子たちの一日も、基本的には相違はない。ただ釈尊は仏弟子たちを教え導く立場、仏弟子たちは教えを聞く立場であるから、たとえば訪問という場面をとらえるなら、釈尊は弟子たちに訪問される立場、仏弟子たちは釈尊を訪問する立場という違いが生じてくるのは当然である。

[1] まず早朝時分の過ごし方を検討する。「早朝」というのは夜明けから乞食に出る10時半頃までの時間帯のことであることは何度も述べた。

[1-1] この時間帯の生活様態についての情報はあまりなく、基本的には前節の釈尊の生活を述べたところと変わりはない。事例は多くないが一般的に考えれば坐禅をして過ごしたり⁽¹⁾、釈尊を訪ねて法を聞いたり⁽²⁾することが多かったであろう。そして注意すべきは比丘尼の住処を訪ねて教誡したというものが2件あることである⁽³⁾。次に紹介する「乞食に出て早かったので他のことをする」の中にも同様のデータが2件含まれるので、合わせると4件ということになる。そこで振り返って釈尊データを調べてみると、この時間帯に病気の摩訶波闍波提を見舞われたというものがある。そしてそのとき「比丘尼が病める時を除いて、比丘尼の住処に行って教誡してはならない」という規定を定められたということになっているから、ここにいわれるケースも比丘尼の病氣を見舞ったのであろうと推測される。夕方にも独坐から起って比丘尼のところに行くというデータもないではないが、比丘尼の病氣見舞いは早朝の時間帯が多かったのかもしれない⁽⁴⁾。

仏弟子固有の情報としては、「その他」の中で整理した、「人々は早朝に (*kālass' eva*) 粥と蜜丸を調べて、比丘らは早朝に (*kālass' eva*) それを食べて飽食した」というものがあり⁽⁵⁾、律蔵の共住弟子の和尚に対する務めの中に書かれていたように、やはりこの時間帯に粥などを食べることがあったであろうということが推測される。

また「その他」には「サンガのために嚼食や供養食が送られた」⁽⁶⁾「提婆達多の徒は五百釜食を送られた」⁽⁷⁾などというものも含めた。これは正餐としての食のことであるが、送られてきたのは早朝時分に属すると考えて、この時間帯で整理したのである。したがって食事時分の生活様式の1つになるが、仏弟子たちは僧院で在家信者から送られた食事を食するというケースもあったことがわかる。また「温泉で沐浴した」⁽⁸⁾が2件、「川に行って沐浴した」⁽⁹⁾というものや、「その夜が過ぎたとき大雨が降り、世尊はこれが最後の雨であろうと、比丘らに雨を浴びさせられた」⁽¹⁰⁾とするものが1件ずつある。早朝時分に洗浴することもあったわけである。

(1) 『別訳雑阿含』329 (大正02 p.485上)

(2) 『雑阿含』989 (大正02 p.257中)

(3) *SN.47-10* (vol.V pp.154~155)、*SN.16-10* (vol.II p.214)

(4) 『雑阿含』276 (大正02 p.074上)、『中阿含』100「苦陰経」(大正01 p.587中)

(5) *Vinaya* 薬毘度 vol. I p.222

(6) *Vinaya* 薬毘度 vol. I p.214、*Vinaya* 波逸提 46 (vol.IV p.099)、*Vinaya* 波羅夷 1 (vol.III pp.015, 016)

- (7) 『雑阿含』1064 (大正02 p.276 中)
- (8) *MN.133 Mahākaccānabhaddekaratta-s.* (vol.III p.192)、中阿含165「温泉林天経」(大正01 p.696 中)
- (9) 『別訳雑阿含』18 (大正02 p.379 下)
- (10) *Vinaya* 衣毘度 (vol. I p.291)

[1-2] また早朝時分の後半ということになるが、乞食に出たけれども乞食するには早い時分の事績として、外道の遊行者の園 (*aññatitthiyānaṃ paribbājakānaṃ ārāmo*) に行つて問答したというものが12件(表には出してないが「早朝時分の過ごし方」中の41%に相当する)もある⁽¹⁾。これは釈尊の5件よりも多い。遊行者 (*paribbājaka*) は常識的に考えれば食を乞食によって得る修行者であるが、この時間帯に釈尊や仏弟子たちが彼らの住する園をしばしば訪問したとすれば、この時間帯には彼らは園にいたることが通常であったのであろう。とするならば彼らは食事時分を含める午前中には乞食に出る習慣がなく、仏教の修行者とは異なって、夕方に行つたのかもしれない⁽²⁾。

また前項で紹介したように、この時間帯の仏弟子の行動として「比丘尼の住処を訪れて教誡」が2件⁽³⁾、「バラモンを訪問」が1件⁽⁴⁾含まれている。

- (1) *MN.13 Mahādukkhakkhandha-s.* (vol. I pp.083~84)、*SN.12-24* (vol. II pp.032, 035)、*SN.46-52* (vol. V pp.108, 109)、*SN.46-53* (vol. V p.112)、*SN.46-54* (vol. V pp.115~117)、*AN.7-39* (vol. IV pp.035~36)、*AN.7-40* (vol. IV p.037)、*AN.9-12* (vol. IV p.378)、*AN.10-27* (vol. V pp.048~49)、『雑阿含』713 (大正02 p.191 上)、『雑阿含』743 (大正02 p.197 中)、『増一阿含』21-9 (大正02 p.604 下)
- (2) 『モノグラフ』第7号に掲載した「原始仏教聖典におけるバラモン修行者」で紹介したように、バラモン教の修行者の乞食についての規定は区々である。「乞食 (*bhikṣa*) するにあたっては、あれこれ心を散動させることなく、夕方 (*sāya*) にひっそりと目立たないようにして、乞食の者たちが村落からいなくなつてからにするがよい」という規定があるかと思えば(上記論文 p.084)、夜は食べてはならないという規定もあり(同 p.106)、また「夜 (*nakta*) かあるいは昼 (*divā*) (のいずれか) に食すべし」という規定もあり、また「炊煙が絶えたとき (*vidhūme*)、杵の音がしなくなったとき (*sanna-musale*)、炭火が消えたとき (*vyāṅgāre*)、人々が食事を終えたとき (*bhuktavajjane*)、容器の片づけが終わつたとき (*vṛtte śarāvasapāte*)、乞食に回るべきである」などという規定もあつて(同 p.107)、実態はよく解らない。
- (3) 『雑阿含』615 (大正02 p.172 上)、『雑阿含』564 (大正02 p.148 上)
- (4) *MN.108 Gopakamoggallāna-s.* (vol. III p.007)

[2] 次に仏弟子たちの「食事時分」の生活様態を考察する。これは正餐をとる食事時分であつて、朝の10時半頃から食事を終わつて後片づけが終わる午後1時頃までの時間帯である。

[2-1] 食事は乞食によって得るのが普通であつて138件(「食事時分の過ごし方」中の75%)ある。その乞食を1人で行つたとするものは94件(「乞食の人数」中の68%)で⁽¹⁾、原則として乞食は1人で行われたことがわかる。しかし釈尊のところでもふれた通り、和尚と呼ばれる長老比丘たちはおそらく随従沙門というお伴をともなつていたであろう。具体的に随従沙門に触れる資料が2件⁽²⁾ある。しかし釈尊と違ってパーリでは「多くの比丘たち (*sambahulā bhikkhū*)」、漢訳では「衆多比丘」などとするものが34件(「乞食の人数」

中の25%)ある(3)。しかし前節にも書いたように、4人以上の集団で行動することは別衆行動になって律の規定に反するから、おそらく比丘たちが三々五々別々に乞食に出たということが「多くの比丘たちが乞食に出た」という表現になったものであろう。もしこのように推測することが許されるならば、仏弟子たちもほとんどの場合は1人かあるいは随従沙門を引き連れて乞食に出たということになる。しかし「誰かを誘って2人で」というものもある(4)から、2人づれで乞食に出ることもあったわけである。ともかく律蔵の規定では3人までなら集団行動が許されている。

そして乞食で得られたものは律蔵の規定を紹介したところで述べたように出先で食べたり、あるいは僧院に持ち帰って食べたのである。「施食をもらいそこで食べた」というデータが2件あるが、それは「垣根に寄りかかって食べた」(5)とされており、施食を持ち帰ったというものも1件(6)ある。釈尊は僧院で食事をされることはなかったようであるから、この点は仏弟子と違うのかもしれない。仏弟子たちはあくまでもサンガの一員であるが、釈尊の場合は必ずしもそういう位置づけにはなっていないからであろう。

- (1) MN.66 *Laṭukikopama-s.* (vol. I pp.447~448)、MN.5 *Anaṅgaṇa-s.* (vol. I p.031)、MN.12 *Mahāsihanāda-s.* (vol. I p.068)、MN.50 *Māratajjaniya-s.* (vol. I pp.333, 336)、MN.86 *Āṅgulimāla-s.* (vol. II p.102)、MN.88 *Bāhitika-s.* (vol. II p.112)、MN.97 *Dhānañjāni-s.* (vol. II p.186)、MN.146 *Nandakovāda-s.* (vol. III pp.271, 276)、SN.5-1 (vol. I p.128)、SN.5-2 (vol. I p.129)、SN.5-3 (vol. I pp.129~130)、SN.5-4 (vol. I p.130)、SN.5-5 (vol. I p.131)、SN.5-6 (vol. I p.132)、SN.5-7 (vol. I p.133)、SN.5-8 (vol. I p.133)、SN.5-9 (vol. I p.134)、SN.5-10 (vol. I pp.134~135)、SN.6-3 (vol. I p.140)、SN.7-21 (vol. I pp.182~183)、SN.17-4 (vol. II p.228)、SN.17-5 (vol. II p.229)、SN.17-9 (vol. II p.231)、SN.28-1 (vol. III p.235)、SN.28-10 (vol. III p.238)、SN.45-4 (vol. V pp.004~5)、SN.47-10 (vol. V pp.154~155)、SN.56-45 (vol. V p.453)、AN.9-3 (vol. IV p.354)、*Udāna* 1-6 (p.004)、*Udāna* 4-1 (pp.034~35)、*Udāna* 5-8 (p.060)、*Vinaya* 波羅夷1 (vol. III pp.015, 016)、*Vinaya* 波羅夷1 (vol. III p.021)、*Vinaya* 僧残6 (vol. III p.145)、*Vinaya* 捨墮5 (vol. III p.208)、*Vinaya* 比丘尼・波逸提52 (vol. IV p.308)、*Vinaya* 大犍度 (vol. I p.039)、*Vinaya* 大犍度 (vol. I p.192)、*Vinaya* 小事犍度 (vol. II p.125)、*Vinaya* 破僧犍度 (vol. II p.198)、SN.12-24 (vol. II pp.032, 035)、AN.7-39 (vol. IV pp.035~36)、AN.9-12 (vol. IV p.378)、MN.35 *Mahāsaccaka-s.* (vol. I pp.227~236)、MN.82 *Ratthapāla-s.* (vol. II pp.061, 063)、*Vinaya* 僧残13 (vol. III p.181)、『雜阿含』1082 (大正02 p.283中)、『長阿含』15「阿菴夷經」(大正01 p.067下)、『雜阿含』99 (大正02 p.027下)、『雜阿含』104 (大正02 p.031上)、『雜阿含』110 (大正02 p.035上)、『雜阿含』236 (大正02 p.057中)、『雜阿含』255 (大正02 p.063中)、『雜阿含』262 (大正02 p.066中)、『雜阿含』276 (大正02 p.074上)、『雜阿含』276 (大正02 p.075下)、『雜阿含』311 (大正02 p.089下)、『雜阿含』405 (大正02 p.108中)、『雜阿含』500 (大正02 p.131下)、『雜阿含』555 (大正02 p.145下)、『雜阿含』604 (大正02 p.164上)、『雜阿含』615 (大正02 p.172上)、『雜阿含』769 (大正02 p.200下)、『雜阿含』830 (大正02 p.213上)、『雜阿含』1100 (大正02 p.289中)、『雜阿含』1199 (大正02 p.326上)、『雜阿含』1200 (大正02 p.326中)、『雜阿含』1201 (大正02 p.326下)、『雜阿含』1202 (大正02 p.327上)、『雜阿含』1203 (大正02 p.327中)、『雜阿含』1204 (大正02 p.327下)、『雜阿含』1205 (大正02 p.328上)、

- 『雑阿含』1206 (大正 02 p.328 中)、『雑阿含』1207 (大正 02 p.328 下)、『雑阿含』1213 (大正 02 p.330 下)、『雑阿含』1347 (大正 02 p.371 上)、『別訳雑阿含』214 (大正 02 p.453 中)、『別訳雑阿含』217 (大正 02 p.454 中)、『別訳雑阿含』218 (大正 02 p.454 下)、『別訳雑阿含』219 (大正 02 p.455 上)、『別訳雑阿含』221 (大正 02 p.455 中)、『別訳雑阿含』222 (大正 02 p.455 下)、『別訳雑阿含』223 (大正 02 p.456 上)、『別訳雑阿含』255 (大正 02 p.463 上)、『別訳雑阿含』265 (大正 02 p.466 下)、『別訳雑阿含』215 (大正 2 p.453 下)、『雑阿含』1082 (大正 02 p.283 中)、『長阿含』15「阿菴夷経」(大正 01 p.066 下)、「仏説鶡峩髻経」(大正 02 p.511 中)、『増一阿含』12-6 (大正 02 p.570 上)、『増一阿含』31-2 (大正 02 p.667 上)、『増一阿含』38-6 (大正 02 p.721 上)、『中阿含』192「加楼優烏夷経」(大正 01 p.740 下)
- (2) SN.8-4 (vol. I p.188)、『雑阿含』1214 (大正 02 p.331 上)
- (3) SN.3-9 (vol. I p.076)、SN.3-10 (vol. I p.077)、SN.3-14 (vol. I p.083)、SN.3-15 (vol. I p.084)、AN.3-64 (vol. I p.185)、AN.6-41 (vol. III p.340)、*Udāna* 4-8 (pp.044~45)、*Udāna* 6-4 (p.067)、*Udāna* 6-5 (p.070)、*Udāna* 6-8 (p.071)、*Udāna* 7-3 (p.075)、*Udāna* 7-4 (p.075)、*Udāna* 7-10 (p.079)、*Vinaya* 波羅夷 1 (vol. III p.006)、*Vinaya* 波逸提 31 (vol. IV p.069)、MN.13 *Mahādukkhakkhandha-s.* (vol. I pp.083~84)、SN.46-54 (vol. V pp.115~117)、AN.10-27 (vol. V pp.048~49)、『雑阿含』57 (大正 02 p.013 下)、『雑阿含』852 (大正 02 p.217 上)、『雑阿含』970 (大正 02 p.250 上)、『雑阿含』971 (大正 02 p.250 下)、『雑阿含』1064 (大正 02 p.276 中)、『雑阿含』1065 (大正 02 p.276 下)、『雑阿含』1083 (大正 02 p.284 上)、『雑阿含』1234 (大正 02 p.338 上)、『雑阿含』1235 (大正 02 p.338 中)、『雑阿含』1236 (大正 02 p.338 中)、『別訳雑阿含』4 (大正 02 p.374 下)、『別訳雑阿含』61 (大正 02 p.394 下)、『別訳雑阿含』63 (大正 02 p.395 下)、『雑阿含』713 (大正 02 p.191 上)、『雑阿含』743 (大正 02 p.197 中)、「仏説鶡峩髻経」(大正 02 p.510 中)
- (4) SN.19-1 (vol. II p.254)、*Vinaya* 波羅夷 4 (vol. III p.104)、*Vinaya* 小事毘度 (vol. II p.111)、『雑阿含』508 (大正 02 p.135 上)、『雑阿含』509 (大正 02 p.135 中)、『雑阿含』510 (大正 02 p.135 下)、『雑阿含』523 (大正 02 p.137 中)
- (5) MN.82 *Ratthapāla-s.* (vol. II pp.061, 063)、*Vinaya* 波羅夷 1 (vol. III pp.015, 016)
- (6) *Vinaya* 大毘度 (vol. I p.039)。王舎城でアッサジが乞食するのを舍利弗が目撃したという舍利弗帰仏の因縁を記すものであるから、まだサンガが成立していない時期の事例である。

[2-2] また釈尊と同様に、乞食中に家に招き入れられて食事の供応を受けることもあった。22件(「食事時分の過ごし方」中の12%)⁽¹⁾が見いだされるから、これもそれほどまれなことではなかったであろう。乞食は1人で行うことが多いのであるから、この場合も原則として招かれるのは1人である。随従沙門を連れている場合も2件⁽²⁾あるが、これも乞食の時の人数と軌を一にする。またこの時にあったことも説法教誡とか問答であるから、これも釈尊の場合と同じである。データの「その他」には特記すべきものはない。

- (1) MN.82 *Ratthapāla-s.* (vol. II pp.061, 063)、*Udāna* 3-7 (p.029)、*Vinaya* 僧残 4 (vol. III p.131)、*Vinaya* 不定 1 (vol. III p.187)、*Vinaya* 波逸提 7 (vol. IV p.020)、*Vinaya* 大毘度 (vol. I p.208)、*Vinaya* 羯磨毘度 (vol. II pp.010, 011)、DN.10 *Subha-s.* (vol. I p.205)、MN.126 *Bhūmija-s.* (vol. III p.138)、SN.55-26 (vol. V p.381)、SN.55-27 (vol. V p.385)、AN.6-44 (vol. III pp.347~348)、AN.8-21 (vol. IV p.209)、AN.8-22 (vol. IV p.212)、AN.8-23 (vol. IV p.217)、AN.10-75 (vol. V pp.137~138)、*Vinaya* 提舍尼 3 (vol. IV p.180)、*Vinaya* 僧残 13 (vol. III p.181)、

『雑阿含』549 (大正02 p.143上)、『雑阿含』554 (大正02 p.145上)、『雑阿含』990 (大正02 p.257中)、『雑阿含』991 (大正02 p.258上)

(2) 上記中の *DN.10 Subha-s.* (vol. I p.205)、*SN.55-26* (vol. V p.381)

[2-3] 仏弟子たちも前日からの招待を受けて食事を供給される場合があった。24件(「食事時分の過ごし方」中の13%)である。しかし釈尊の場合はほとんどが「仏を上首とするサンガ」全体の招待であったが、仏弟子の場合は1人という場合が11件(「招待の人数」中の46%)⁽¹⁾ であってもっとも多い。多くの場合は特定の比丘を最眞にする家があり、その招待であったであろう。これに対して釈尊の場合は、サンガ全体でなければ招きを受けないという不文律があったのであろう。

これに次ぐのが「長老比丘ら」「諸上座比丘」などとするもので9件(「招待の人数」中の38%)⁽²⁾ である。別に「比丘サンガ」とするものが2件(「招待の人数」中の8%)⁽³⁾ あり、これはサンガの構成員全員が招かれたということであろうから、「長老比丘ら」などとされるものは別請食 (*uddesa bhatta* 指定食) という形であったのであろう。別請食とは特定の数人の比丘が招待される場合であって、その選抜は差次食人 (*bhattuddesaka*) によってなされるが、法臘によるのが原則である。このデータの中には慈比丘・地比丘が選ばれて行った時には粗末な食しか与えられなかったので文句を言ったというものも含まれるから、この推測を証明する。

また釈尊の項においてふれたように仏弟子データにも「尊者アヌルッダ自身を第4とする比丘 (*āyasmā anuruddho attacattuttho*)」⁽⁴⁾ とか阿那律に明日の食事に「通身四人」を招待した⁽⁵⁾ というものがあり、おそらくこれも別請食であったのであろう。

なおこの招待食が終った時には律蔵が定める通りに、家人を教誡したり、家人の質問に答えたりしたことがデータにも現れている。

(1) *Vinaya* 波逸提 46 (vol. IV p.098)、*SN.17-5* (vol. II p.229)、*SN.17-9* (vol. II p.231)、*Vinaya* 波羅夷 1 (vol. III pp.015, 016)、*MN.55 Jivaka-s.* (vol. I pp.369, 370)、*MN.82 Ratthapāla-s.* (vol. II pp.061, 063)、*SN.35-133* (vol. IV p.122)、*Vinaya* 捨墮 18 (vol. III p.237)、*Vinaya* 波逸提 29 (vol. IV p.066)、*Vinaya* 比丘尼・波逸提 15 (vol. IV p.271)、『雑阿含』253 (大正02 p.061下)

(2) *SN.41-2* (vol. IV p.284)、*SN.41-3* (vol. IV p.285)、*SN.41-4* (vol. IV p.289)、*Vinaya* 羯磨韃度 (vol. II p.017)、*Vinaya* 僧残 8 (vol. III p.161)、*Vinaya* 滅諍韃度 (vol. II p.078)、『雑阿含』569 (大正02 p.150下)、『雑阿含』571 (大正02 p.151中)、*Vinaya* 僧残 8 (vol. III p.160)

(3) *Vinaya* 藥韃度 (vol. I p.222)、*AN.7-50* (vol. IV p.064)

(4) *MN.127 Anuruddha-s.* (vol. III p.145)

(5) 『雑阿含』1038 (大正02 p.270下)

[2-4] 正餐としての食事は以上のように、乞食と乞食中の招待と予めの招待の3つの手段によって得るのが普通であるが、このほかに早朝時分の生活を考察する際にふれておいたように、在家信者によってサンガに差し入れられた食事を僧院において食するという場合があった。

後世においては僧院に住む浄人や在家信者によって、僧院において調理をしたものを食するという場合もあって、これも律蔵において許されているわけであるが⁽¹⁾、原始仏教聖典にはこのようなケースは見いだされない。

- (1) 『パーリ律』の「薬鍵度」(vol. I p.239)に、「人々 (manussā) が3種の相応の地において粥を煮たり、食を煮たり、汁を調えたり、肉を切り、薪を割くことを許す。相応の地とは、布告によるもの (ussāvanantika 最辺の露地か?)、牛舎 (gonisādika)、在家人のもの (gahapati)」とされている。『四分律』(大正22 p.875上、下)にも「料理すべきは、守僧伽藍民・もしは沙弥・もしは優婆塞なり」とある。また病比丘のためには比丘ら自身が調理することも許されている。

[2-5] 以上のように仏弟子たちの食事も、一人一人が村や町に乞食に入って得るのがもともと普通であり、乞食中には家に招き入れられて座を設けられ、食事を接待されることもあった。その他予め明日の食事を招待される場合もあったが、これは釈尊の場合とは異なってサンガ全員が招待されることはほとんどなく、1人とか3人未満の比丘たちの場合が多かった。4人以上の場合もあったが、これは律蔵の規定にしたがって別請食という形がとられた。このほかに、在家信者によって食が僧院に送られ、それを食することもあった。

[3] 次に仏弟子たちの「午後時分」の過ごし方を考察する。これは食事の後片づけがすんでから、夕方時分が始まるまでの、春秋の昼夜の長さが等しい季節においては、午後1時頃から午後5時くらいまでの、4時間くらいの時間帯である。

[3-1] 「午後時分」の仏弟子たちの過ごし方でもっとも資料が多いのは釈尊と同様に「昼日住に入る」というもので69件(「午後時分の過ごし方」中の37%)である。その場所も釈尊と同様に原則としては園林の樹下であって59件(「昼日住の場所」中の86%)⁽¹⁾、人数は1人であって68件(「昼日住の人数」中の99%)である。そのほかに昼日住の場所としては房⁽²⁾や岩山など⁽³⁾とするものがあるがごくわずかな例である。

それでは仏弟子たちはこの昼日住でどのようなことを行ったのであろうか。昼日住というのは独坐するのが前提であるから、独坐中にどのようなことが起こったかということである。そのなかで悪魔が現れたとするもの⁽⁴⁾が28件(「昼日住でしたこと」中の41%)でもっとも多いが、その大部分は比丘尼である。そのほかに比丘には不善心が起こったとするものがあって10件(「昼日住でしたこと」中の14%)あって、この場合には天神が現れてそれをいさめるというケースが多い。この2つのケースは、仏ならぬ身が独坐して心を清めようとするのに、よからぬ心が起こって坐禅を乱すことが多いということを説話的に表現したものであろう。さりとて資料が多いからといって、これが比丘尼や比丘の独坐の常態であったというわけではなく、経典には異常事態ほど記録されることが多いのであるから、特殊なケースであったと理解した方がよいであろう。しかし独坐にはこのような危険性が常につきまわっていたということである。

またこの間に「王やバラモンなどと対話・教誡」したというものが5件(「昼日住でしたこと」中の7%)ある。また「他比丘が尋ねてきて問答」が1件あり、その他に昼日住ではない項目の中に「他の仏弟子を訪ねる」⁽⁵⁾が3件あって、これも加算して考えることができる。釈尊の場合と同様に、独坐中には在家信者や他の比丘などが尋ねてきて、問答を交わすということもあったのである。

また昼日住の間に睡眠したというものも7件(「昼日住でしたこと」中の10%)あり、そのほかに昼日住ではない項目の中に昼寝というものが1件ある⁽⁶⁾。この「午後時分」はいわば自由時間であって、昼寝をすることも許されていたわけである。

- (1) *MN.62 Mahārāhulovāda-s.* (vol. I pp.420~421) 、 *MN.66 Laṭukikopama-s.* (vol. I pp.447~448) 、 『雑阿含』 806 (大正 02 p.206 下) 、 *MN.82 Ratthapāla-s.* (vol. II pp.061, 063) 、 *SN.5-1* (vol. I p.128) 、 *SN.5-2* (vol. I p.129) 、 *SN.5-3* (vol. I pp.129~130) 、 *SN.5-4* (vol. I p.130) 、 *SN.5-5* (vol. I p.131) 、 *SN.5-6* (vol. I p.132) 、 *SN.5-7* (vol. I p.133) 、 *SN.5-8* (vol. I p.133) 、 *SN.5-9* (vol. I p.134) 、 *SN.5-10* (vol. I pp.134~135) 、 *SN.28-1* (vol. III p.235) 、 *AN.9-3* (vol. IV p.354) 、 *Udāna 4-1* (pp.034~35) 、 *Vinaya 捨墮 5* (vol. III p.208) 、 *MN.82 Ratthapāla-s.* (vol. II pp.061,063) 、 『雑阿含』 1082 (大正 02 p.283 中) 、 『雑阿含』 236 (大正 02 p.057 中) 、 『雑阿含』 1100 (大正 02 p.289 中) 、 『雑阿含』 1199 (大正 02 p.326 上) 、 『雑阿含』 1200 (大正 02 p.326 中) 、 『雑阿含』 1201 (大正 02 p.326 下) 、 『雑阿含』 1202 (大正 02 p.327 上) 、 『雑阿含』 1203 (大正 02 p.327 中) 、 『雑阿含』 1204 (大正 02 p.327 下) 、 『雑阿含』 1205 (大正 02 p.328 上) 、 『雑阿含』 1206 (大正 02 p.328 中) 、 『雑阿含』 1207 (大正 02 p.328 下) 、 『別訳雑阿含』 214 (大正 02 p.453 中) 、 『別訳雑阿含』 217 (大正 02 p.454 中) 、 『別訳雑阿含』 218 (大正 02 p.454 下) 、 『別訳雑阿含』 219 (大正 02 p.455 上) 、 『別訳雑阿含』 221 (大正 02 p.455 中) 、 『別訳雑阿含』 222 (大正 02 p.455 下) 、 『別訳雑阿含』 223 (大正 02 p.456 上) 、 『別訳雑阿含』 215 (大正 2 p.453 下) 、 *SN.9-1* (vol. I p.197) 、 『雑阿含』 1333 (大正 2 p.368 上) 、 *SN.9-2* (vol. I p.198) 、 『雑阿含』 1332 (大正 2 p.367 下) 、 『別訳雑阿含』 351 (大正 2 p.489 中) 、 *SN.9-3* (vol. I p.198) 、 *SN.9-11* (vol. I p.203) 、 『雑阿含』 1334 (大正 2 p.368 中) 、 *Udāna 1-8* (p.005) 、 *Vinaya 波羅夷 1* (vol. III p.037) 、 *Vinaya 波羅夷 1* (vol. III p.037) 、 『雑阿含』 1082 (大正 02 p.283 中) 、 『雑阿含』 1332 (大正 02 p.367 下) 、 『雑阿含』 1335 (大正 02 p.368 中) 、 『雑阿含』 905 (大正 02 p.226 中) 、 『別訳雑阿含』 352 (大正 02 p.489 下) 、 『増一阿含』 12-6 (大正 02 p.570 上) 、 *MN.24 Rathavinīta-s.* (vol. I pp.146~147) 、 『中阿含』 72 「長寿王本起経」 (大正 01 p.536 上) 、 『中阿含』 192 「加楼優烏夷経」 (大正 01 p.740 下)
- (2) 『雑阿含』 255 (大正 02 p.063 中) 、 『雑阿含』 276 (大正 02 p.074 上) 、 『雑阿含』 1213 (大正 02 p.330 下) 、 *SN.21-4* (vol. II pp.277~278) 、 『別訳雑阿含』 353 (大正 2 p.490 上)
- (3) *Theragāthā vs.1059, 60, 61, DN.23 Pāyāsi-s.* (vol. I p.356) 、 *MN.97 Dhānañjāni-s.* (vol. II p.186) 。他にその場所を詳らかにしないものが 2 件ある。*MN.112 Chabbisodhana-s.* (vol. III p.035) 、 *AN.8-46* (vol. IV p.264)
- (4) 以下すべて上記のデータの中に含まれるので省略する。
- (5) *Vinaya 僧残 6* (vol. III p.145) 、 『雑阿含』 104 (大正 02 p.031 上) 、 『雑阿含』 276 (大正 02 p.075 下)
- (6) *MN.36 Mahāsaccaka-s.* (vol. I p.249)

[3-2] 昼日住のほかにはデータ数が多いのは、「世尊を訪ねて報告質問」で 68 件（「午後時分の過ごし方」中の 36%）⁽¹⁾ がある。このほかにも釈尊データのところで昼日住の際に「仏弟子と対話」が 7 件あるから、これは釈尊の側からすると仏弟子の訪問を受けたということを表わしている。さいわいに釈尊がそばにおられる場合には、仏弟子たちはこの機会を逃がしてなるものかとばかりに、釈尊が昼日住されているところを訪ねて質問したり、教誡を受けたりしたのであろう。

- (1) *MN.12 Mahāsīhanāda-s.* (vol. I p.068) 、 *MN.86 Aṅgulimāla-s.* (vol. II p.102) 、 *SN.3-9* (vol. I p.076) 、 *SN.3-10* (vol. I p.077) 、 *SN.3-14* (vol. I p.083) 、 *SN.3-15* (vol. I p.084) 、 *SN.7-21* (vol. I pp.182~183) 、 *SN.19-1* (vol. II p.254) 、

SN.45-4 (vol. V pp.004~5) 、 SN.47-10 (vol. V pp.154~155) 、 SN.56-45 (vol. V p.453) 、 AN.3-64 (vol. I p.185) 、 *Udāna* 4-8 (pp.044~45) 、 *Udāna* 5-8 (p.060) 、 *Udāna* 6-4 (p.067) 、 *Udāna* 6-5 (p.070) 、 *Udāna* 6-8 (p.071) 、 *Udāna* 7-3 (p.075) 、 *Udāna* 7-4 (p.075) 、 *Udāna* 7-10 (p.079) 、 *Vinaya* 波羅夷4 (vol. III p.104) 、 *Vinaya* 破僧犍度 (vol. II p.198) 、 MN.13 *Mahādukkhakkhandha-s.* (vol. I pp.083~84) 、 SN.12-24 (vol. II pp.032, 035) 、 SN.46-54 (vol. V pp.115~117) 、 AN.7-39 (vol. IV pp.035~36) 、 AN.7-40 (vol. IV p.037) 、 AN.9-12 (vol. IV p.378) 、 AN.10-27 (vol. V pp.048~49) 、 MN.35 *Mahāsaccaka-s.* (vol. I pp.227~236) 、 MN.126 *Bhūmija-s.* (vol. III p.138) 、 SN.55-26 (vol. V p.381) 、 AN.6-44 (vol. III pp.347~348) 、 AN.8-21 (vol. IV p.209) 、 AN.8-22 (vol. IV p.212) 、 AN.8-23 (vol. IV p.217) 、 AN.10-75 (vol. V pp.137~138) 、 『長阿含』 15「阿菴夷經」 (大正 01 p.067 下) 、 『雜阿含』 405 (大正 02 p.108 中) 、 『雜阿含』 508 (大正 02 p.135 上) 、 『雜阿含』 509 (大正 02 p.135 中) 、 『雜阿含』 510 (大正 02 p.135 下) 、 『雜阿含』 523 (大正 02 p.137 中) 、 『雜阿含』 615 (大正 02 p.172 上) 、 『雜阿含』 769 (大正 02 p.200 下) 、 『雜阿含』 852 (大正 02 p.217 上) 、 『雜阿含』 970 (大正 02 p.250 上) 、 『雜阿含』 971 (大正 02 p.250 下) 、 『雜阿含』 990 (大正 02 p.257 中) 、 『雜阿含』 1064 (大正 02 p.276 中) 、 『雜阿含』 1065 (大正 02 p.276 下) 、 『雜阿含』 1083 (大正 02 p.284 上) 、 『雜阿含』 1234 (大正 02 p.338 上) 、 『雜阿含』 1235 (大正 02 p.338 中) 、 『雜阿含』 1236 (大正 02 p.338 中) 、 『別訳雜阿含』 4 (大正 02 p.374 下) 、 『別訳雜阿含』 61 (大正 02 p.394 下) 、 『別訳雜阿含』 63 (大正 02 p.395 下) 、 『別訳雜阿含』 255 (大正 02 p.463 上) 、 『雜阿含』 713 (大正 02 p.191 上) 、 『雜阿含』 743 (大正 02 p.197 中) 、 『長阿含』 15「阿菴夷經」 (大正 01 p.066 下) 、 「仏説鶖崛髻經」 (大正 02 p.510 中) 、 「仏説鶖崛髻經」 (大正 02 p.511 中) 、 『増一阿含』 12-7 (大正 02 p.570 下) 、 『増一阿含』 21-9 (大正 02 p.604 下) 、 『増一阿含』 31-2 (大正 02 p.667 上) 、 『増一阿含』 38-6 (大正 02 p.0721 上)

[3-3] また集会堂など比丘たちが集まる施設の中に複数の比丘たちが集まって法談をするケースが 27 件 (「午後時分の過ごし方」中の 14%) ある⁽¹⁾。しかし時にはそれが争いごとになったり、あるいは好ましからぬ畜生論などに陥ることもあった。また比丘や比丘尼などが集まっている集会堂に行って説法をするという事例も 6 件 (「午後時分の過ごし方」中の 3%) あり⁽²⁾、これらもこの資料に加えることができる。

また「釈尊データ」には、昼日住に住されていた時、神通力で比丘たちが議論しているのを聞かれて、夕方に独坐を起たれてから講堂などに赴いて説法するという事例が 50 件もあり、これも仏弟子たちが昼日住の間に議論などをしていたという資料に加えることができるであろう。「比丘らが夕方に独坐から起って講堂などに集まり、議論をしていた時に」とも解されなくはないが、仏弟子の夕方データの中にそのようなケースは 1 件もないから、これは午後時分の比丘たちの法談を釈尊が聴かれて、それを受けて夕方に説法されたと解釈する他ないであろう。

(1) MN.88 *Bāhitika-s.* (vol. II p.112) 、 DN.119 *Kāyagātāsati-s.* (vol. III p.088) 、 DN.123 *Acchariyabbhutadhamma-s.* (vol. III pp.118~119) 、 SN.41-1 (vol. IV pp.281~282) 、 SN.56-1 (vol. V p.436) 、 AN.6-60 (vol. III p.392) 、 AN.6-61 (vol. III p.399) 、 AN.10-50 (vol. V p.089) 、 AN.10-69 (vol. V p.128) 、 *Udāna* 3-8 (p.030) 、 *Udāna* 3-9 (p.031) 、 *Vinaya* 僧残 8 (vol. III p.160) 、 『長阿含』 1「大本經」 (大正 01 p.001 中) 、 『長阿含』 21「梵動經」 (大正 01 p.088 中) 、 『長阿含』 30「世記經」

(大正 01 p.114 中)、「起世経」巻 1 (大正 01 p.310 上)、「起世因本经」(大正 01 p.365 上)、『中阿含』12「愁破经」(大正 01 p.434 上)、『中阿含』59「三十二相经」(大正 01 p.493 上)、『中阿含』66「説本经」(大正 01 p.508 下)、『中阿含』81「念身经」(大正 01 p.554 下)、『中阿含』82「支離弥梨经」(大正 01 p.557 下)、『中阿含』99「苦因经」(大正 01 p.584 下)、『中阿含』160「阿蘭那经」(大正 01 p.682 中)、『増一阿含』40-1 (大正 02 p.735 中)、『増一阿含』47-4 (大正 02 p.781 中)、*Udāna* 2-2 (p.011)

(2) *MN.146 Nandakovāda-s.* (vol.III pp.271,276)、『雑阿含』494 (大正 02 p.128 下)、『雑阿含』1069 (大正 02 p.277 中)、*MN.132 Ānandabhaddekaratta-s.* (vol.III p.189)、*SN.21-7* (vol.II p.280)、*AN.4-48* (vol.II p.051)

[3-4] またこの時分に遊行したという資料が 4 件(「午後時分の過ごし方」中の 2%)あり⁽¹⁾、釈尊のところでも指摘したように、遊行期間中の遊行はこの午後時分に行われたことが判る。

(1) 『雑阿含』57 (大正 02 p.013 下)、『雑阿含』262 (大正 02 p.066 中)、『雑阿含』311 (大正 02 p.089 下)、『雑阿含』830 (大正 02 p.213 上)

[3-5] 以上から、午後時分は原則として自由時間であり、仏弟子たちはさまざまなことを行っていた。多くの場合は昼日住に住して園林の樹下で 1 人静かに坐禅をしたり、集会堂などに集まって法談したり、他の比丘を訪問しあったり、時には昼寝をすることもあった。また遊行はこの時間帯を利用して行われた。また釈尊が近くに住しておられる場合は、すすんで釈尊を訪ねて教えを受けた。

ところで当時はまだ文字に書かれた経典がなかった時代であるから、経文を誦すとか、それを読んで勉強するということは行われていず、また集会堂などで授業形式の法話などもあまり行われなかったことが想像される。今でいえば仏教学に相当する教理体系に関する勉強とか研究といったことは主な修行徳目ではなく、禅定によって心を清らかにすることが修行の中心であったのであろう。

[4] 次に「夕方時分」の過ごし方を考察する。夕方時分は多くの場合、昼日住の独坐を起ってから日没までの時間帯であって、昼夜の長さが等しい春秋の頃では、午後 5 時頃から日没の 6 時半くらいまでの 1 時間半くらいの時間帯である。

[4-1] 仏弟子たちの「夕方時分」の過ごし方でデータの一番多いものは「独坐から起って世尊を訪問」であって 55 件(「夕方時分の過ごし方」中の 51%)である⁽¹⁾。昼日住の独坐において起こった疑問を釈尊に質問して教えを受けたのであろう。

(1) *MN.62 Mahārāhulovāda-s.* (vol.I pp.420~421)、*MN.66 Laṭṭikopama-s.* (vol.I pp.447~448)、『雑阿含』806 (大正 02 p.206 下)、*AN.9-3* (vol.IV p.354)、*Udāna* 4-1 (pp.034~35)、『雑阿含』236 (大正 02 p.057 中)、『雑阿含』1100 (大正 02 p.289 中)、『雑阿含』1218 (大正 02 p.332 中)、『中阿含』99「苦因经」(大正 01 p.584 下)、『増一阿含』12-6 (大正 02 p.570 上)、*MN.8 Sallekha-s.* (vol.I p.040)、*MN.63 Cūlamāluṅkyā-s.* (vol.I p.427)、*MN.121 Cūlasuññata-s.* (vol.III p.104)、*MN.145 Punovāda-s.* (vol.III p.267)、*MN.145 Piṇḍapātapārisuddhi-s.* (vol.III p.293)、*AN.7-66* (vol.IV p.121)、*AN.8-46* (vol.IV p.264)、*Udāna* 5-1 (p.048)、*Suttanipāta* 2-12 (p.059)、*Vinaya* 滅浄健度 (vol.II p.075)、『中阿含』7「世間福经」(大正 01 p.427 下)、『中阿含』32「未曾有法经」(大正 01 p.469 下)、『中阿含』

42「何義経」(大正01 p.485上)、『中阿含』56「弥醯经」(大正01 p.491中)、『中阿含』60「三十二相经」(大正01 p.494中)、『中阿含』61「牛粪喻经」(大正01 p.496上)、『中阿含』76「郁伽支罗经」(大正01 p.543下)、『中阿含』86「説处经」(大正01 p.562上)、『中阿含』91「周那問見经」(大正01 p.573中)、『中阿含』97「大因经」(大正01 p.578中)、『中阿含』104「優曇婆羅经」(大正01 p.595下)、『中阿含』172「心经」(大正01 p.709上)、『中阿含』181「多界经」(大正01 p.723上)、『中阿含』190「小空经」(大正01 p.736下)、『中阿含』192「加楼優烏夷经」(大正01 p.740下)、『中阿含』197「優曇離经」(大正01 p.755下)、『中阿含』221「箭喻经」(大正01 p.804上)、『雜阿含』111(大正02 p.037下)、『雜阿含』112(大正02 p.037下)、『雜阿含』113(大正02 p.038上)、『雜阿含』114(大正02 p.038上)、『雜阿含』115(大正02 p.038中)、『雜阿含』116(大正02 p.038下)、『雜阿含』117(大正02 p.038下)、『雜阿含』118(大正02 p.039上)、『雜阿含』119(大正02 p.039中)、『雜阿含』264(大正02 p.067下)、『雜阿含』906(大正02 p.226中)、『雜阿含』983(大正02 p.255下)、『雜阿含』1073(大正02 p.278下)、『雜阿含』1138(大正02 p.300中)、『雜阿含』1139(大正02 p.300下)、『雜阿含』1140(大正02 p.301上)、『雜阿含』1141(大正02 p.301下)、「仏説満願子经」(大正02 p.502下)

[4-2] またこれは仏弟子たちの主体的な行為ではないから「仏弟子データ」には現れていないが「釈尊データ」の方に、比丘たちが集まっている講堂などに釈尊が独坐から起った後に訪れられて説法されたというものが50件もあり⁽¹⁾、夕方には講堂などに集まって釈尊の法話を聞くということもしばしば行われたであろう。

(1) 第4節の[4-1]参照。

[4-3] また「独坐から起って他の比丘を訪問」が46件(「夕方時分の過ごし方」中の43%)あり⁽¹⁾、仏弟子同士が訪問しあって互いに疑問をぶつけあったり、教えを請うたりということも活発に行われたことが判る。この中には病氣見舞いも含まれている。「釈尊データ」のところには、釈尊が独坐から起って仏弟子を訪問というものが15件あるから、時には釈尊の訪問を受けることもあったのである。釈尊のところで考察したように、この場合は比丘が病氣でそのお見舞いというケースがもっとも多い。

この外に独坐から起って外道を訪問したというデータも1件ある⁽²⁾。

(1) 『雜阿含』276(大正02 p.074上)、MN.24 *Rathavinīta-s.* (vol. I pp.146~147)、MN.32 *Mahāgosiṅga-s.* (vol. I pp.212~215、218~219)、MN.43 *Mahāvedalla-s.* (vol. I p.292)、MN.144 *Anāthapiṇḍikovāda-s.* (vol. III p.263)、SN.7-25 (vol. II p.037)、SN.12-67 (vol. II p.112)、SN.16-2 (vol. II p.195)、SN.16-12 (vol. II p.222)、SN.21-3 (vol. II p.275)、SN.22-85 (vol. III p.110)、SN.22-122 (vol. III p.167)、SN.22-123 (vol. III p.169)、SN.22-127~135 (vol. III pp.172~177)、SN.35-87 (vol. IV p.055)、SN.35-191 (vol. IV p.162)、SN.35-192 (vol. IV p.165)、SN.35-193 (vol. IV p.166)、SN.44-3 (vol. IV p.384)、SN.44-6 (vol. IV p.388)、SN.45-18 (vol. V p.016)、SN.46-8 (vol. V p.076)、SN.47-21 (vol. V p.171)、SN.47-26 (vol. V p.174)、SN.52-4 (vol. V p.298)、SN.52-9 (vol. V p.301)、SN.55-4 (vol. V p.346)、SN.55-13 (vol. V p.362)、*Udāna* 5-6 (p.058)、*Vinaya* 皮革韃度 (vol. I p.195)、SN.22-89 (vol. III p.127)、『中阿含』9「七車经」(大正01 p.430中)、『中阿含』29「大拘絺羅经」(大正01 p.461中)、『中阿含』100「苦陰经」(大正01 p.587中)、『中阿含』211「大拘絺羅经」(大正01 p.790中)、『中阿含』218「阿那律陀经」(大正01 p.803上)、『中阿含』219「阿那律陀经」(大正01

p.803 上)、『雑阿含』250(大正02 p.060 上)、『雑阿含』251(大正02 p.060 中)、
『雑阿含』256(大正02 p.064 中)、『雑阿含』257(大正02 p.064 下)、『雑阿含』
258(大正02 p.065 上)、『雑阿含』259(大正02 p.065 中)、『雑阿含』288(大正
02 p.081 上)、『雑阿含』344(大正02 p.094 中)、『雑阿含』719(大正02 p.193 中)

(2) MN.76 *Sandaka-s.* (vol. I p.513)

[4-4] 以上のほかに、「早くに独坐から起った者が、水を汲んできたりして他の比丘たちの面倒を見た」という記事が2件ある⁽¹⁾。

ところで釈尊の生活様態を考察した時には、夕方時分に水浴されたというデータのあることを紹介した。*Dīghanikāya-Aṭṭhakatā*の記述でも釈尊の水浴は夕方であった。しかし仏弟子データには早朝時分に水浴したというデータがあることはすでに見た通りであり、また和尚に対する共住弟子の奉仕の仕方のところでは、水浴や暖房での入浴などは午後時分に行われるように書かれていることは先に指摘した。しかし『パーリ律』波逸提57には比丘らが王舎城の温泉に入っていて、これを待っていた王がとうとう門が閉じてしまって城内に入れなかったという記事があり⁽²⁾、これによれば夕方にも水浴が行われたということが推測される。また『僧祇律』单提50⁽³⁾や『根本有部律』波逸底迦60⁽⁴⁾には王の浴する温泉に比丘や比丘尼らが四六時中入っているの、王が入れなかったというエピソードを記している。このように水浴は随時に行われたのであり、水浴に適した特定の時分はなかったと結論づけもよいかもしれない。

(1) 『中阿含』72「長寿王本起経」(大正01 p.536 上)、『中阿含』185「牛角娑羅林経」(大正01 p.729 下)

(2) *Vinaya* 波夜提57 vol.IV p.116

(3) 大正22 p.371 下

(4) 大正23 p.847 上

[4-5] 以上、夕方の時間帯に仏弟子たちが行ったことは、独坐から起って世尊を訪問したり、講堂などに集まって釈尊の説法を聞いたり、仏弟子同士が互いに訪問しあって議論したり、教えを受けたりするということであった。

[5] 最後に「夜の時分」の過ごし方を考察する。夜の時分はもちろん日没から夜明けまでの間である。なおこの時分の資料は釈尊データと同様にないに等しい。

したがって経に説かれているあるべき姿を紹介する他ないであろう。それは初夜には禅定して心を清め、中夜に意を正しく持って睡眠し、後夜に起き出してまた禅定する、ということである。

先に述べたように、釈尊の教えにはタブーというものはなかったから、夜間でも黙し難い疑問が起こったら釈尊を訪ねて教えを受けることもあったし、仏弟子同士が質問をぶつけあうこともあったであろう。